

城下町の冬の風景

神戸大学経済経営研究所
附属政策研究リエゾンセンター
准教授 藤村 聡

10月中旬の新聞は、大阪の御堂筋で恒例の「銀杏落とし」が行われたことを伝えた。記事によれば御堂筋の街路樹であるイチョウの銀杏を振り落とし、それを市民が拾い集めるというイベントで、今年で25回目を数えるという。都市の美観と環境に配慮して始められたらしく、大阪の季節の行事としては定着したのかもしれない。

現在の都市はイベントばやりで、季節を問わず様々なイベントが催されている。イベント好きは近世城下町も同様であり、江戸の三社祭をはじめとする著名な祭礼は枚挙にいとまがない。ここではそうした宗教行事ではなく、もっと生活に密着した都市一体型の年中行事を見てみよう。舞台は北国の都である江戸時代の福井である。

福井は越前藩32万石の城下町で、武家町民を合わせて約3万人（現在の福井市は約25万人）が居住した。近世都市では、参勤交代で強制的に武家人口が集住した江戸が約100万人で最も多く、ついで「天下の台所」の大坂が約40万人、公家寺社が集住する京都がそれをやや下回る程度で、この三都が突出した規模であった。その他の地方都市はせいぜい数万人にすぎず、10万石の城下町の金沢でさえも10万人に及ばず、福井の3万人は江戸時代では相当の大都市である。

福井が誇るべき都市機能の一つは「芝原上水」の存在である。近世の上水道は江戸のような水道管が地中に埋設された暗渠タイプと、上水路が露出した開渠タイプがあり、上水路を持つ近世都市の大部分は開渠タイプであった。福井の芝原上水も開渠タイプであり、九頭竜川に取水口が設けられ、十数キロを流れた後に福井市街に入り、武家屋敷地区～福井城内～町地と貫流し、住居者たちに飲料水を供給した。町地では上水路の幅は3メートル近くあり、街路から水面に降りる石段が各所に設置されていた。

芝原上水の管理維持のために福井藩は上水掛目付や上水奉行を置き、配下の足軽が毎日城下を巡回し、違反行為の摘発や破損の有無を調べた。修復費用は原則的に各利用者の負担とされ、それぞれの武家屋敷の持主や上水を利用する各町が拠出し、日々の清掃も各利用者の責任であった。

上水の利用規程違反で最も多いのが、塵芥の掃き捨てなどによる汚濁である。市民は規定を充分承知していたので違反事例は少ないが、村々からやってきた奉公人が上水路にゴミを掃き込み、罰金を科料されたケースが散見される。長く福井に居住して違反規定を理解していながらも、ある魚

屋は上水路にゴミを投げ捨て、足軽に見つかるや脱兎の如く逃げ出して誰とも判別できない事件が続いたため、業を煮やした上水奉行はその町全体に上水利用の禁止を命じたという事例もある。

上水を清浄に保つことが維持管理の最重要事項の一つであり、ゴミの投げ捨てや上水路内での洗濯は厳禁であったが、そのなかに特別な例外として公認された年中行事があった。それが「大根洗い」である。

冬季は深い雪に閉ざされる北国では漬物が必需食料品であり、その主原料は大量の大根であった。武家は屋敷内の畑で大根を栽培することも可能であり、町民はもっぱら近郊農家から購入したらしい。大根は樽に漬け込む前に泥を落とす必要があり、そのため毎年 11 月半ばに福井藩は 1 日だけ上水路で大根を洗うことを許可した。

当日の城下では武家町民を問わず、一斉に上水路で大根が洗う光景が繰り広げられ、芋の子ならぬ大根洗いの混雑や喧噪はさぞかし壮観であったと思われる。上水路の端には、まだ土が付いた大根が積み上げられ、その傍らのムシロには洗い上げられた真っ白な肌の大根が山のように重ねられたはずである。大根を洗う手は冷たい水にかじかみ、季節は初冬であるから小雪も舞っていたかもしれない。大根洗いの後、住民たちによって清掃が行われ、上水路は再び清潔な状態に戻された。まもなく本格的に雪の季節が訪れ、城下町は北国の長い冬を迎えることになる。

ここで述べた「大根洗い」は、福井藩の「上水掛り旧例考」という古文書で見出した出来事である。今日の福井では、こうした年中行事があったことは知られておらず、失われた記憶の一つと言えよう。マルクスにせよ近代化論せよ、発展史観の底流には「我々は何を受け継いできたのか」という問題意識があり、過去から現在まで続いている事項が分析対象になる。それに対して今日定着したアナール学派の社会史は「我々は何を失ったのか」という問題意識から古文書の丹念な渉獵を重要視する。発掘される事項の多くは些末すぎて論文のネタにはならないが、そんな卑近な難点はさておいて、トリビアな歴史的記憶に触れ、過去の世界に思いを馳せることは、歴史そのものを愛する者の秘やかな楽しみなのである。